

きつともう、此の儘何処にも着かないよ

誰かを傷つけ

愉悦を零すような人間に対して

父が私を膝の上にのせ爪を切ってくれる過去があれば

優しくなれたのだろうか

間違えて出してしまった絵の具を

勿体ないからと言う理由で

ネイルとして塗る同級生がいれば

私は忘れたくないと思えただろうか

シャンプーハットがなくなった浴室の虚無感から

ビート板がなくなり鼻を突き抜ける痛みに

やり場のない焦燥を

私はどうやって想い出せばいいのだろうか

校舎内は右側通行で

車道は左側通行で

間違えた先の未来に

むかい逢う二人を欲しているのだろうか

やがて

全ての情動を置き去りに

私はかけがえのない夢を視る

例え明日世界が滅びようとも

明後日

後悔を語るのなら

それが幼いと言うことなのだろう

そうして

私は成長してしまう

保育園の校庭で駆け廻ったあの頃を忘れて

家庭科室でミシンの音を聴いてまどろむ時間を失って

何故だろう

気が付けば修学旅行のバスに揺られている

夕に滲む光景を前に

今更後悔することを悟っている

此の儘、何処にも着かないといいね

もう誰かすらも分からない懐かしい声

どうして

私は今を受け入れられているのだろう

三年で強いられて出来た大人になれたからだろうか

目を瞑る

もどかしさは伝播する寝息に掻き消え

永遠に更新されることなく

私は今日が人生で一番綺麗な日であって欲しかった